

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	トマス・コーラムと18世紀イギリスにおけるロンドン・ファウン ドリング・ホスピタル
Author(s)	園井, ゆり
Citation	広島大学大学院総合科学研究科紀要. II, 環境科学研究, 14 : 37 - 57
Issue Date	2019-12-31
DOI	
Self DOI	10.15027/48892
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048892
Right	掲載された論文, 研究ノート, 要旨などの著作権・著作権は広島 大学大学院総合科学研究科に帰属する。 Copyright (c) 2019 Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University, All rights reserved.
Relation	



トマス・コーラムと18世紀イギリスにおける ロンドン・ファウンドリング・ホスピタル

園井 ゆり

広島大学大学院総合科学研究科

Tomas Coram and the London Foundling Hospital in Eighteenth-Century Britain

SONOI Yuri

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

Thomas Coram established the London Foundling Hospital in Great Britain in 1739. Research on Coram and the London Foundling Hospital has generally examined Coram's biography as well as the methods of the hospital in caring for children, while overlooking in-depth qualitative analysis of Coram's motivations. In this paper, I considered sociological perspectives regarding the motivations of Coram in establishing the Foundling Hospital. I used documentary analysis of Coram's correspondence, his personal petition to King George II, and the Royal Charter for the Incorporation of the Foundling Hospital to examine the reasons why a semi-retired seaman (whose usual concerns might have been far removed from promoting the well-being of children) was motivated to provide deserted children with a residential institution. I found that Coram had both utilitarian and altruistic motivations in setting up the hospital. His utilitarian motivations can be seen in his personal petition to the King, in which he stated that one of the aims of the Foundling Hospital was to transform abandoned children, who were considered a public nuisance, into good servants and useful soldiers for the country. Coram might have deliberately shown his utilitarian motivation to provide pragmatic benefits for the foundling cause, particularly at the time when Britain was continuously engaged in wars in neighboring countries. Coram's altruistic motivation can be seen in his commitment to his belief that foundling children should be properly cared for and educated, with the goal that they are eventually able to support themselves. To achieve his goal, he systematically lobbied influential individuals, in person, to collect their signatures. This lobbying at last enabled him to obtain a Charter of Incorporation from the King. Although this petitioning occupied seventeen years of his life, he finally collected 375 signatures from 89 nobles and 286 commoners who supported his project. It might be suggested that the nearly twenty years of campaigning could be explained by Coram's utilitarian and altruistic attitudes.

1. 問題の所在と本稿の目的

本稿の目的は、イギリスで1739年にトマス・コーラム(Thomas Coram, 1668-1751) (以降、コーラムと記す) によって設立されたファウンドリング・ホスピタル(the Foundling Hospital) に焦点をあて、その設立事情を検討することにより、ファウンドリング・ホスピタル設立に至ったコーラムの動機を解明することである。ファウンドリング・ホスピタルとは、イギリスで最初に設立された、現代で言うところの児童養護施設である。従って、ファウンドリング・ホスピタルは現代の社会的養護体系における施設養護の一形態として位置づけられる¹。

このファウンドリング・ホスピタルのことを小林・齊藤は「捨て子育児院」と訳出するが(小林・齊藤2011:211)、以下に述べる通り、本稿ではそのままファウンドリング・ホスピタルと呼ぶことにする。foundling と hospital の語源を、The Oxford English Dictionary(1989)でみると、foundling という語は、「両親が不明の、要求する者が誰もいない捨てられた児童」の意で、1300年からこの意味で使用されていた²。hospital という語は、「貧困者、虚弱者、高齢者のための慈善保護施設」の意で、この意味では1418年から使用されていた。the Foundling Hospital の Hospital という語は、特に上記の意味で使用されており、医療施設という意味で使われているのではない。したがって、1739年に設立されたthe Foundling Hospital を「捨て子育児院」と訳出することは、語義に照らすと適当である(Simpson and Weiner 1989: 122, 414)。しかしながら、ファウンドリング・ホスピタルにおける実際の児童の養育状況をみると、ファウンドリング・ホスピタルでは、児童の受け入れにあたって、将来的に親族らによる児童の引き取りが想定されており、実際、親族らによって児童が引き取られる事例もあったことから、ファウンドリング・ホスピタルは、児童の、一時的な養育施設——現代の児童養護施設——の役割を果たしていたと考えられる(とはいえ、現代の児童養護施設においても、「捨て子」(棄児)は約500人程度存在

する(2013年))。ファウンドリング・ホスピタルでは、児童は「捨て子」のみではなく、親族等との関係性を持った児童も存在していた、という点で、本稿では、そのままファウンドリング・ホスピタルと呼ぶことにしたい(厚生労働省雇用均等・児童家庭局)。

ファウンドリング・ホスピタルでは主に5歳から10歳頃までの児童が生活していた(乳幼児は授乳等のため地方の里親に委託され養育されていた)。在所中、児童はファウンドリング・ホスピタルを退所後に、社会的に自立できるように必要な教育及び技能訓練を施されていた。児童は10歳頃に達すると、ホスピタルを退所し、徒弟に出され、20代はじめ頃に独立した。ファウンドリング・ホスピタルでは1741年に最初の児童を受け入れて以降、1953年に閉所するまでの約200年間にわたり、総計約2万7千人の、貧民層の児童の養育と教育が行われた(Amos et al. 2006: 23; Howell 2014: 13, 24, 31-33; McClure 1981: 49; Wagner 2004:151)。

このファウンドリング・ホスピタルを設立したコーラムは、1668年にイギリス南西部ドーセット州のライム・レジス(Lyme Regis)に生まれた。Figure 1はコーラムの友人で、イギリス人画家ウィリアム・ Hogarth (William Hogarth, 1697-1764) が描いたコーラムの肖像画である(Hogarth 1740; Howell 2014: 51)。船乗りの親方を父に持ったコーラムは——コーラムの父はのちに船長の称号を付与される——、10代を船大工見習いとして過ごし、船乗りとして、また商人としての十分な知識を身につける(コーラムの母はコーラムが6歳の時に他界する)。1693年、コーラムは25歳の時に、イギリスの植民地の一つであった、アメリカ東部マサチューセッツ州ボストンにわたり、造船業を始める。1697年、コーラムは、トントン(Taunton)というボストンから約65キロ南の町に移り住む。トントンは、オーク厚板、モミ材など、造船資材の調達がより容易であったためである。コーラムは1704年に本国イギリスに戻るまでの11年間で、アメリカで造船業を営みながら過ごす(Howell 2014: 10; McClure 17; Wagner 2004:2, 11, 20)。



Figure 1. William Hogarth, *Captain Thomas Coram (1668-1751)*, 1740.

Source: Coram in the care of the Foundling Museum. (Art UK)(https://artuk.org/discover/artworks/captain-thomas-coram-16681751-191925/search/venue:the-foundling-museum-7069-55167/page/3/view_as/grid) Retrieved July 25, 2019.

Note: コーラムの右手には国王ジョージ2世から下賜されたファウンディング・ホスピタル設立を許可する丸い国璽(Great Seal)が握られ、机の上には勅許状(Royal Charter)が置かれている。古びた赤いコートをまとい、当時としては珍しくかつらを被らない状態で描かれたのは、17年間をファウンディング・ホスピタルの設立に費やしたコーラムの苦難の道りを伝えるためである。背景には海運業に携わっていたコーラムを彷彿とさせる海の絵と前景には地球儀が描かれている(Howell 2014: 51; 2018).

コーラムがイギリスに帰国した背景には、コーラムとアメリカの入植者との間に宗教上の確執が存在したことがある。トントンでコーラムが開始した造船事業は、コーラムと入植者との間の宗教的確執のために結局頓挫し、コーラムは本国への帰国を余儀なくされる。

この宗教的確執とは、コーラムはイギリス国教会信徒(Anglican)であったが、トントンの人々

は大多数がピューリタン(Puritans)(清教徒)であったことに起因する。特に、コーラムが造船業を展開したアメリカ東部は、1620年に、ステュアート朝絶対王政下にあるイギリスから——当時のイギリス国王ジェームズ1世(James I, 1566-1625, 在位1603-1625)は、ピューリタン弾圧政策をとった——、信仰の自由を求めて移住したピューリタンの一団(ピルグリム=ファーザーズ)によって開

拓された土地であり、イギリス植民地下における、ピューリタンの町として発展していた（吉村(森本)2015: 47; 全国歴史教育研究協議会編2008:173, 194)。

コーラムが移り住んだ頃の17世紀末のボストンは、マサチューセッツ湾自治植民地(the Province of Massachusetts Bay)の中心地であった。このマサチューセッツ湾自治植民地は、もともと1630年にマサチューセッツ湾植民地(the Massachusetts Bay Colony)として成立したところである。このマサチューセッツ湾植民地は、当初マサチューセッツ湾会社(the Massachusetts Bay Company)というごく少数の経営者らによって設立された会社組織として成立したところであった。

マサチューセッツ湾会社は、本部をロンドンにおく株式会社であり、この会社はアメリカで得た利潤の一部を、イギリス国王にも納めていた。従って、本国イギリスからみると、この会社はイギリスに利益をもたらす、植民地の一先機関として位置づけられていた。それゆえ、宗教上も、この会社は少なくとも設立当初は、イギリス本国の宗教——すなわち、イギリス国教会——との調和を保ちながら展開していたと考えられる(明石1999:38; 大西1997:15-16)。

しかし、マサチューセッツ湾会社の経営者らは、ピューリタンの宗教教義に強い影響を受けた人々であった³。このため、彼らはアメリカに入植後は、次第にイギリス国教会からの宗教的離脱を先鋭化させていくことになった。彼らは、ピューリタンの中でも会衆派(Congregationalism)に属していたため、教会を、国家や王権からは独立した存在であるべきだと捉えていた。従って、マサチューセッツに入植後は、彼らの宗教的理念を実現するべく、マサチューセッツ湾植民地内に、次々にピューリタンの教会を設立していった。新しく信者になることを希望する者に対しては、何よりイギリス国教会から分離すること、また教会に集った信徒ら(会衆)の前で自身の信仰を告白すること等を、教会への入会資格として厳格に求めた(大西1997:15-16, 30-31)。

このような背景を持つマサチューセッツ湾会社を母体として成立したマサチューセッツ湾植民地

は、その後近隣のプリマス植民地(the Plymouth Colony, 1620年設立)、メイン植民地(the Province of Maine, 1622年認可、後述)、マーサズ・ビンヤード島(Martha's Vineyard)、ノバ・スコシア(Nova Scotia)等を次々に併合し、ついに自治植民地としての地位を得、1691年マサチューセッツ湾自治植民地としてイギリス国王より認可されるに至る(自治植民地としての効力は1692年に発生する)。

コーラムが訪れた17世紀末のボストンは、ピューリタンの信仰が人々の間に根付いていたと同時に、イギリス国教会に対する根強い反発が存在していたと考えられる。従って、イギリス国教会信徒であるコーラムと、ピューリタンであるボストンの人々との間に存在した、宗教的確執がコーラムのアメリカでの造船事業の展開を阻んだ一因となった(Amos and Mayers 2005:8-9; Howell 2014:10; McClure 1981:17)。

アメリカでの事業が失敗に終わったコーラムは、1704年、36歳の時に本国イギリスに帰国する。ロンドンに戻ったコーラムは、引き続き造船業を続けるとともにアメリカ植民地との間で貿易事業を展開する。その後、1713年から1720年頃までは、スペイン継承戦争(1701-13)終結に伴い除隊された、失業中のイギリス軍人のための福祉事業に携わる。この事業は、除隊されたイギリス軍人を、植民地アメリカに入植させる、という計画であった。移住先として想定されていたのは、主に、現在のアメリカ東北部のメイン州にほぼ相当する土地であった。しかし、コーラムのこの計画は再びアメリカ植民地側の抵抗にあい失敗に終わる。メイン州に相当するその土地は、当時、マサチューセッツ湾自治植民地の管轄下にあった。このため、マサチューセッツ湾自治植民地がメイン州の管轄権を主張し、コーラムの入植計画に反対したのである⁴。加えて、マサチューセッツ湾自治植民地の代表(colonial agent)ジェレミア・ダマー(Jeremiah Dummer, 1681-1739)の猛反対にも遭遇する。ダマーは、イギリス除隊軍人の、マサチューセッツ湾自治植民地への入植は、マサチューセッツ湾自治植民地内の住人の権利を奪うことになりかねない、ということを恐れた。このため、植民地アメリカに対するコーラムの事業計画は再び失敗に終

わる (Howell 2014:10; McClure 1981:18-9; Pugh 22; Wagner 2004:2, 46)。

自身の手掛けた事業が二度、失敗に終わったコーラムは、1720年、52歳の時に事業から身を引き、船員らが多く住むロンドン東部、テムズ川沿いにある、ロザーハイズ (Rotherhithe) という町に隠居する (McClure(1981: 19)は、コーラムは、造船業からは1720年以前に身を引いていたと指摘する) (Howell 2014: 10; McClure 1981:19; Sheetz-Nguyen 2012: 50)。当時、テムズ川流域は物流の拠点として活気に溢れ、多くの船舶が行き交う場であった。テムズ川流域にはドック (dock) と呼ばれる埠頭が設けられ、船舶関係者や港湾労働者らが多く住んでいた (上村2013; 徳仁親王1991)。

Figure 2はジョン・ロック (John Rocque, 1709-1762)

が1746年に描いた18世紀のロンドンの地図である。コーラムが隠居したロザーハイズは図中、概ねH2に相当する場所である (Rocque 1746)。

18世紀イギリスの法、慣習、風俗等について考察したArchenholz (1791)は、当時のロンドンの様子を以下のように述べる。これによると、ロンドンの町はその東側と西側とで大きく様相が異なっていたことがわかる。

The city, especially the houses along the banks of the Thames, is composed of old ruins: the streets are narrow, obscure, and badly paved: it is the residence of the seamen, of the workmen employed in ship-building, and of a great part of the Jews who reside in London. The contrast betwixt that and the western parts of the

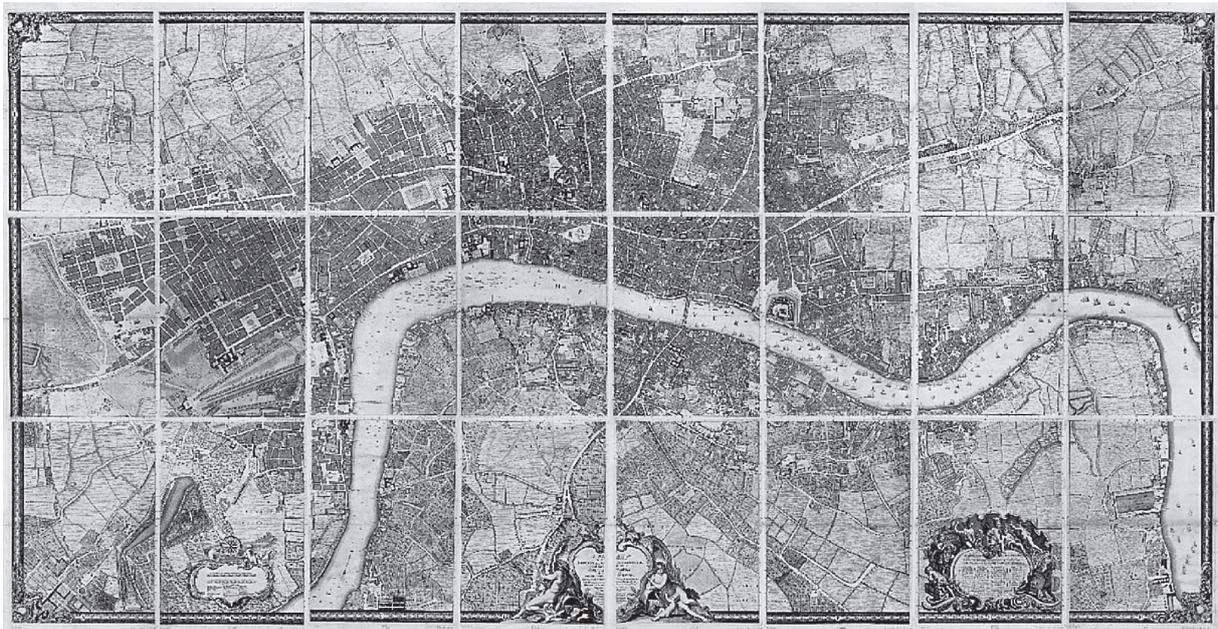


Figure 2. Rocque, John, John Pine, and John Tinney. 1746. *A Plan of the Cities of London and Westminster, and Borough of Southwark, with the Contiguous Buildings.*

Source: Library of Congress, Geography and Map Division. (<https://www.loc.gov/item/76696823/>) Retrieved January 22, 2020.

Note: この地図は下記の通り24の区画から構成されている。

A	B	C	D	E	F	G	H	
								1
								2
								3

中心を曲流するのはテムズ川である。現在のロザーハイズは、およそ右端の中央 (H2) にある、テムズ川が大きく湾曲した付近の南側に位置する。ロンドン市中心部はロンドン塔 (F2) より西側の、テムズ川の北側にほぼ位置する。

metropolis is astonishing: the houses there are almost all new, and of an excellent construction; the squares are magnificent; the streets are built in straight lines, and perfectly well lighted: no city in Europe is better paved. If London were equally well built, no place in the whole world would be comparable to it. (Archenholz 1791: 77)

Archenholz (1791:77)によると、18世紀当時、ロンドンの東側——特にテムズ川河畔——は、古く荒廃した建物が建ちならんでおり、道は狭く、暗く、舗装も悪かった。そこには船乗りや造船業に携わる労働者、多くのユダヤ人が住んでいた。一方、ロンドンの西側は、東側とは驚くほどその様相が異なっていた。家屋は新しく、立派で、広場は素晴らしく、道は真っ直ぐで明るく照らされていた。ここからは、当時のロンドンが東側は主に労働者層が暮らす街として、西側は富裕層が暮らす街として発展していた様子がうかがえる(小林 1986: 27-28, 31)。

また、ロンドンの社会史を著したPorter(1995)は、18世紀ロンドンの様子を、小説家ヘンリー・フィールディング(Henry Fielding, 1707-1754)及び上述した画家ホガースの叙述から、以下のように記す。すなわち、当時のロndonは、虚栄と偽りと詐欺に満ちた町であった。特にロンドンのニューゲート刑務所からタイバーンの処刑場に至るまでの道中やベドラム精神科病院付近は、疾病、暴力、汚物、喧噪、倒壊した建物、売春、貧困、泥酔、自殺、狂気等の社会病理が蔓延する、無秩序状態であったと述べる。

Moralists lacerated London. Henry Fielding exposed its vanity, deceits and cheats, and William Hogarth's capital—Newgate, the Fleet, Tyburn, Bedlam—was all disease and violence, filth, noise, falling buildings and fallen women, chaos, poverty, drunkenness, suicide, distress, disarray, infidelity and insanity. . . . (Porter 1995: 164)

ここからは、18世紀当時、ロンドンでは特に都市化の弊害が町の隅々に蔓延していた状況が

うかがえる。従って、コーラムが、住まいのあるロザーハイズからテムズ川流域の波止場やロンドン中心部に向かう道中などで、貧民層の、特に児童がおかれた惨状を目にしたことは容易に想像できる(Howell 2014: 10; McClure 1981: 19; Nichols et al. 1935:3; Pugh 2007:24; Sheetz-Nguyen 2012:50; Wagner 2004:61)。Wagner(2004:61)は、ロザーハイズに隠居中のコーラムが、貧民層が暮らす通り——その通りは、死んだ犬猫や汚物やゴミが散乱していたであろうが——では、そこに捨てられた家畜の糞の山の上に、死んだ、あるいは死にかけの乳幼児が混じっている様子を目の当たりにしたであろう、と指摘する。

コーラムが貧困児童の様子を目の当たりにした状況を、19世紀イギリスを代表する作家チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)は、以下のように叙述する。ディケンズは当時ファウンドリング・ホスピタルの近くに住んでおり、ファウンドリング・ホスピタルとそこで暮らす児童に高い関心を持っていた。確かにディケンズは、コーラムが活躍した時代より1世紀ほど後の人物ではあるが、このような事情から先行研究においても言及されることが多く、本稿でも参照することにした(Ollington and Wiseman 2018:22; Pugh 2007:23 Sheetz-Nguyen 2012:50; 吉村(森本)2015:51)。

In or about the Christian year one thousand seven hundred and twenty-two: a good old time, when England had had too much to do, through all the good old times intervening since the days of Pope Innocent the Third, to do anything whatever for Foundlings; in or about that year there dwelt in London the gentle sea captain, THOMAS CORAM. Although the captain had made his fortune on the American plantations, and had seen sights in his day, he came out of it all with a tender heart; and this tender heart of Captain Coram was so affected by seeing blank children, dead and alive, habitually exposed by the wayside as he journeyed from Rotherhithe (where he had set up his retreat that he might keep a loving eye

on the river) to the Docks and Royal Exchange, and from the Docks and Royal Exchange home to Rotherhithe again to receive the old shipmate, who was generally coming to dinner, that he could not bear it. . . . (Dickens 1853: 49)

ディケンズは、コーラムが、1722年頃、テムズ川沿いの隠居所であったロザーハイズから波止場(Docks)や王立取引所(Royal Exchange)——王立取引所はロンドンの中心部に位置し (Figure 2の図中、概ねE2に相当する場所にある)、商人や貿易商が集う商業取引の中心地であった——へ向かう道中で、そして夕食に招いた船乗り仲間を出迎えるべく、再び波止場や王立取引所からロザーハイズへと向かう道中で、ある者は死に、ある者は生きのまま、路上に遺棄されていた、「空欄の子どもたち(blank children)」——ディケンズは、ファウンドリング・ホスピタルに親が児童を預ける様子を見て貧困児童のことをこう表現した。ホスピタルに児童を預ける際、親は申し込み用紙の空欄に日付や性別等を記入した上で、児童を預けていた——を常に目の当たりにし、その光景に耐えられなかったのではないかと指摘する(Dickens 1853:49)。すなわち、コーラムは自宅のあったロザーハイズ (Figure 2のH2) と波止場や王立取引所(Figure 2のE2) の間を往復する中で、貧困児童の惨状を目にしたと考えられる。実際、コーラムはロザーハイズに隠居して2年後の1722年から、貧民層の児童を救うべく、その後17年の歳月をかけてファウンドリング・ホスピタルの設立に向け奔走することになる(McClure 1981:19)。

本稿の目的は、児童、特に貧民層の児童の養育と教育とは全く関わりのなかった船大工のコーラムが、造船、貿易事業を引退後、50歳を過ぎた時点でなぜ貧民層の児童の養育に関心を持ち、17年間の歳月をかけてこれらの児童のためにファウンドリング・ホスピタルを設立するに至ったか、という問題関心にに基づき、これをコーラムの動機に着目し分析することである。

本稿では特に、ホスピタル設立のため、コーラムがイギリス国王から勅許状(Royal Charter of Incorporation)を得るまでの過程に焦点をあて、

コーラムの動機を分析する。その際、本稿ではコーラムの動機を、特に現代的立場からみた場合の解釈によって捉えることにしたい。

2. 先行研究と分析方法

トマス・コーラム及びファウンドリング・ホスピタルに関してはこれまで国内外において広範な研究がなされている(Howell 2014; 川北1990; 小林1986; McClure 1981; Nichols et al. 1935; Pugh 2007; Sheetz-Nguyen: 2012; Wagner 2004; 山口2000; 吉村(森本)2015)。Nichols et al.(1935)の研究は、ファウンドリング・ホスピタルの歴史を、18世紀のホスピタル開所時から20世紀前半に至るまで詳述したものである。また、McClure(1981)の研究は、主に18世紀におけるファウンドリング・ホスピタルの児童の養育状況を検討したものである。McClure(1981)、Nichols et al.(1935)の両研究はその後のコーラム研究及びファウンドリング・ホスピタル研究の先駆的基盤を提供するものである。Howell(2014)は、ファウンドリング・ホスピタルの歴史的経緯を概説するとともに、ファウンドリング・ホスピタルの創設と展開に貢献した著名人——作曲家ヘンデル(George Frideric Handel, 1685-1759)、先述したイギリス人画家ウィリアム・ホガース等——についての検討もあわせて行っている。ほか、ファウンドリング・ホスピタル創設を中心にコーラムの人生を詳述した研究(Wagner 2004)、19世紀ファウンドリング・ホスピタルの歴史的展開過程を、特に児童をホスピタルに預け入れざるを得なかった当時の女性が置かれた立場から、詳細なデータとともに検討した研究(Sheetz-Nguyen 2012)等がある。

ファウンドリング・ホスピタルを設立したコーラムの動機について、これらの研究は、養育放棄された児童に対する同情(sympathies)から(Sheetz-Nguyen 2012: 50)、公共善(public good)——公共善という考え方を持つことは18世紀のイギリスにおいては未だ稀な特質であった——とコーラムが信じたものへの愛他的精神から(Wagner 2004:77)、貧民層の児童の惨状をみて衝撃を受けたから(McClure 1981:19)等と指摘する。また、川

北(1990:170-174)は、コーラムの動機を、18世紀イギリスにおける重商主義政策を反映した上での博愛主義、と指摘する。すなわち、当時イギリスはスペインやオーストリア等との対外戦争を行っていたため、兵力をいかに増強するかが当時のイギリスにおける重大な課題であった。そこで、路上に遺棄された児童を、将来の兵士に養成するために、つまり国力増強の一環として、コーラムはファウンドリング・ホスピタルを設立したのではないか、と川北は指摘する。

従って、先行研究によるとコーラムがファウンドリング・ホスピタルを設立した動機には、少なくとも公共善及び博愛ないし愛他的な考え方が関わることが指摘できる。公共善は、多義的な概念であり詳細な検討を要するが、本稿では、コーラムの動機をより明確に検討するため、公共善を、功利主義的な観点から捉えることにしたい。

功利主義は、ジェレミー・ベンサム(Jeremy Bentham, 1748-1832)及びジョン＝ステュワート＝ミル(John Stuart Mill, 1806-73)を中心に体系化された社会思想である。功利主義のもとでは、社会を構成する個々人の利益の量がより増大するほど、社会の利益は増大すると考える。ここで、社会の利益とは、公共の功利、すなわち、公共善を指すと捉えられていた。個人の利益と社会の利益との関係性については、ミルによれば、個人は、社会的存在であることから、社会の利益を、個人の利益よりも重んじると捉え、その背景には、個人の利他的な道德心があると指摘した。すなわち、社会の利益が増大することが明らかであれば、個人は、利他心に基つき、自身の利益を追求することを犠牲にすることも厭わない、とした。

先行研究からは、コーラムは、少なくともファウンドリング・ホスピタルを、社会の利益のため、すなわち、公共善のために設立したと推察されるため、本稿では、コーラムにおいてみられた公共善的な考え方を、功利主義的な動機として捉えることにしたい(Bentham 1789=1967: 82-83; Mill 1863=1967: 475-496)。

また、コーラムにおける愛他的な考え方についてみると、愛他的な考え、すなわち愛他主義は、社会学者オーギュスト・コント(Auguste Comte,

1798-1857)によって考え出された造語である。コントは、愛他主義を、利己主義に対立する概念として位置づける。すなわち、コントによれば、愛他主義とは他者との社会的連帯と、他者への共感に根差した、道徳的性質をもつものであり、それは個人の幸福の源泉となるものとして捉えられていた(Comte 1844=1970: 196-198, 203-207; 大野 1993:2-3)。

従って、先行研究からコーラムがファウンドリング・ホスピタルを設立した動機は、次の2点に要約されるといえるだろう。すなわち、愛他的動機と功利主義的動機である(Riding 2010: 70)⁵。しかし、先行研究においては、両者の関連性については十分明らかにされていない。すなわち、コーラムの愛他的動機と功利主義的動機がいかなる関係性を持つかについては十分解明されていない。そこで本稿では、コーラムの動機における、愛他的動機と功利主義的動機の関連性を検討することを目的とする。その際、本稿では、特に民間人による福祉活動の担い手の動機に関する研究を手掛かりにしなが、この関連性を検討することにした。

民間人による福祉活動の担い手の動機を分析する前に、ファウンドリング・ホスピタルとチャリティ活動との関連性をみることにしたい。なぜなら、ファウンドリング・ホスピタルは、18世紀イギリスにおいて特に盛んであった、チャリティ活動の一環として展開した側面を持つからである。本稿では、当時のイギリス社会における、特にチャリティ活動との関わりからファウンドリング・ホスピタルを位置づける。その際、本稿では、チャリティ活動を、金澤(2008:3)による定義を参考に、次のように定義したい。すなわち、民間人による、非営利の、弱者救済のための自発的な慈善活動としてチャリティ活動を定義する。なお、イギリスにおけるチャリティ活動と福祉活動の関連については、詳細な検討を要するが、本稿では、福祉活動の一形態としてチャリティ活動を捉えることにする(金澤 2008:323)。

18世紀半ばから19世紀に至るまでのイギリスにおけるチャリティ活動を検討した金澤の研究(2008)によると、イギリスにおけるチャリティ活

動は、その運営形態の観点から以下の5つに分類されるといえる。すなわち、「信託型」、(自発的)「結社型」、「友愛組合支援型」、「慣習型」、「個人型」である。「信託型」は、「遺言者がその遺産をもとに設定した基金」を用い、その管理を行う受託者(遺言者の親族等)により運営される慈善の形態である。「結社型」は、「発起人たちが、ある目的を掲げて寄付を募り」、その寄付金に基づき運営される慈善の形態である。「友愛組合支援型」は、労働者同志の互助会組織の形態をとり、各自が収入の一部を拠出しあい、失業や病気等、不測の事態に際し支援金を受け取る慈善の形態である。「慣習型」は、古くからの慣習に基づき行われる慈善の形態であり、「個人型」は、個人が金、食料、物質を貧しい人々に直接与える私的な慈善の形態である(金澤2008: 22, 43, 83, 89, 93)。

上記チャリティ活動の諸形態のなかで、ファウンディング・ホスピタルの運営形態は、(自発的)「結社型」として位置づけられよう。後述するように、コラムは養育放棄された児童の養育、という目的を掲げ、寄付を集めた上でファウンディング・ホスピタルを設立したからである⁶。

このチャリティ活動は、18世紀イギリス社会においていかに位置づけられるだろうか。特に弱者救済という福祉活動の観点からチャリティ活動を位置づけると、当時の弱者救済は、大きく公的救済(the statutory relief system)と私的救済(voluntary charity)の2つの方法で行われていた。具体的には、前者は(国家による)救貧法政策(the Poor Law system、後述)により行われ、後者は主に民間による慈善活動により行われていた。チャリティ活動は、後者の、私的救済の一形態として位置づけられる。従って、チャリティ活動として展開したファウンディング・ホスピタルは、私的救済型の慈善活動ということになる(長谷川2014: 33; Innes: [1996]2016:144-149)。

福祉活動の担い手の動機についてみると、まずチャリティ活動の担い手の動機を分析した金澤(2008: 228-235)によると、チャリティ活動の担い手には、主に、王族や貴族等、地域の有力者の他、総体としての、イギリス人一般が挙げられる。この中で、特にこのイギリス人一般について

みると、イギリス人の国民性というものが、主に18世紀から19世紀におけるチャリティ活動を通して、以下のように形成されたという。すなわち、イギリス人というものは、そもそも慈善心に篤い国民であるということが、さまざまなチャリティ活動を通して言及された。従って、特にこの時期に、イギリス人がチャリティ活動に携わることは、自身の、イギリス人としての、より確かな(国民)意識を形成することを意味した。

次に、第二次世界大戦後のイギリスで出版されたウィリアム・ベバリッジ(William H. Beveridge)の『ボランタリー・アクション——社会的進歩の方法に関する報告』(*Voluntary Action: A Report on Methods of Social Advance*)を参照する。本書は、イギリスにおける福祉国家体制成立期における、民間の、特に福祉分野での自発的行為の役割を研究したもとの位置づけられよう。本書は、第2次世界大戦後のイギリスという特殊な社会的状況下で書かれたものではあるが、民間の、福祉分野における自発的行為を分析するの一つの手がかりを与えると考えられるため参照することにした(Beveridge [1948]2015; 中野 1979; 岡村ほか編 2012:6)。

本書の中で、ベバリッジは民間人による自発的な福祉活動の動機を、主に次の2つに大別する。一つは「相互扶助動機(the Mutual Aid motive)」であり、もう一つは「博愛動機(the Philanthropic motive)」である。前者は、「不幸に対する保障の必要性の感覚、および仲間が同じ必要性を持つがゆえに、相互に助け合うことによって皆が自分自身を助けうる、という実感に起源を持つ」とされる。後者は、「個人の行為によって、他者のための生活をより幸福なものにしようとする願望」であり、それは「社会的良心(social conscience)、すなわち物質的に不自由のない人々が、隣人が物質的に不自由である限り、精神的に安らかではない感情」として示されるものに起因する、とされる。この社会的良心を持つということは、窮乏(Want)、疾病(Disease)、不潔(Squalor)、無知(Ignorance)、怠惰(Idleness)という5つの巨大な社会悪(the giant social evils)から離れて、自分だけ平穏であろうとしたくはないということである。つまり、これらの社会悪の手中

に陥っている仲間から去って、自分自身を個人的な繁栄に逃げ込ませ、平穩でありたくないという感情である (Beveridge [1948]2015:8-9, 121; 金子 2009:49; 中野 1979:68-71)。

中野 (1979:68) は、ベバリッジのこの2つの動機がイギリスにおいていかに展開してきたかを次のように指摘する。すなわち、まず相互扶助動機に基づく民間の自発的行為は、特に「労働者階級」における、共済組合 (friendly societies)、労働組合 (trade unions)、生活協同組合 (co-operative societies) などの相互扶助組織 (Mutual Aid association) として展開した。一方、博愛動機に基づく民間の自発的行為は、19世紀の「産業革命期に新興中産階級によって行なわれた私的な貧民救済活動に起源をもつ、人道主義的な博愛事業」として展開したと指摘する。したがって、相互扶助動機と博愛動機のうち、コーラムの動機により近かった動機は、「私的な貧民救済活動」に起源を持つ、博愛動機であったといえよう (Beveridge [1948]2015:9, 21, 125; 中野 1979:68, 71)。

最後に、社会学研究領域における主に現代の児童福祉活動の担い手の動機に関する研究も、コーラムの動機の分析においては有効と考えられる。現代社会における児童福祉活動の担い手に関する研究の中では、特に社会的養護に関する研究が参考になる。コーラムがファウンドリング・ホスピタルを設立することにより救済しようとした貧民層の児童は、今日でいうところの、いわゆる社会的養護が必要な児童 (以降、要保護児童と記す) に相当するからである。現代において、要保護児童とは、実親等による虐待——例えば養育放棄、監護の怠慢——のため、社会的養護が必要になった児童のことを指す。現代においては、このような要保護児童は、主として児童養護施設等における施設養護か里親家庭等における家庭養護かのいずれかにおいて養育される。

そこで、施設養護と家庭養護のそれぞれの分野における担い手の動機を検討することにしたい。まず施設養護については、特に日本における明治期の代表的な慈善事業家であり医師であった石井十次 (1865-1914) の思想を例に取り上げる。石井は孤児救済のため、1887 (明治20) 年に日本

で最初のキリスト教信仰に基づく孤児院 (児童養護施設) である、岡山孤児院 (創設当初は孤児教育院) を岡山県に創設する。岡山孤児院の事例は、ファウンドリング・ホスピタルの事例とは国も時代も異なるが、両者はともに国内で初めての児童養護施設であったこと、また石井とコーラムという創設者同士の動機が類似していることから岡山孤児院の事例を取り上げることにする。

岡山孤児院を現代の社会的養護体系下に位置づけると、それはファウンドリング・ホスピタルと同様、施設養護の一形態として位置づけられる。岡山孤児院を、比較のためにあえて上述したイギリスのチャリティ活動の枠組みのなかで位置づけると、岡山孤児院もファウンドリング・ホスピタルと同様に、私的救済の範疇における、特に結社型の慈善 (チャリティ) 活動ということになる。すなわち、岡山孤児院は、石井十次という民間の一個人が、孤児院設立のための明確な目的のもとで寄付金により運営していたものである。その設立目的とは、「孤児教育院を便宜の地に設け諸国に散在せる貧困の孤児6歳以上12歳以下のものを集め満15歳迄之を救済教養し国家の良民となし天与の幸福を受けしむるにあり」というものであった (柴田 1964: 34-35, 64)。

石井は、1887年に発表した孤児教育会趣旨書に孤児院設立の理念を以下のように記す。

あゝ世間憐むべきもの斯く夫多し、就中其の最も憐むべきものは、其の家貧にして不幸父母に離るゝ孤児なり。彼等は驕奢淫逸にして貧困に陥る自業自得にあらずして、天性の美質を与へ、靈妙の良知を稟けながら、東西未だ別つ能はざるの時に於て、愛々たる父母の膝下を離れ、依るに所なく、頼むに道なく、發達すべきに其の地なくして、終には頸に囊して路頭に立ち、懶怠放肆無頼の凶悪に陥り、人道の何物たるを知らざるに至るは憫むべきの極と云ふべし... 此の吾人の同胞兄弟にして天父の愛子が此慘状悲況に陥る所以のものは教育なければなり... 必らずや、彼等をして天与の幸福を受けしめ、且つ国家の良民たらしめんが為めに力を盡して此の不幸なる憐むべき貧困にして父母に離るゝ

孤児弟妹を救済せざる可らざるなり.... (柴田 1964: 33)

上記からは、石井は孤児の救済のために、かつ国家の良民を形成するために孤児院を設立したこと、また良民形成のためには孤児に教育を施すことが不可欠であると考えたことが指摘できる。ここからは、石井の動機の背景には功利主義的な愛他主義が存在したということが指摘できよう。

次に、家庭養護についてみる。家庭養護も主に民間の一人である里親によって担われるため、里親の動機の分析を検討することも、コーラムの動機の分析について何らかの手掛かりを与えると考えられる。

里親になった動機を分析したこれまでの研究 (MacGregor et al. 2006; Isomäki 2002; Buehler et al. 2003) からは、愛他主義 (altruism) ないし愛他的使命感 (altruistic calling) が里親になった動機の背景に存在することが明らかにされている。したがって、施設養護と家庭養護に携わった担い手の動機の分析からも、功利主義的な動機と愛他主義的な動機が関わっていることが指摘できる。

なお、本稿における分析の方法については、「ドキュメント解析法」を用いる (森 2000)。すなわち、コーラムの私的な書簡のほか、請願書、勅許状等の公文書資料に依拠し、コーラムの動機を分析する。

3. ファウンディング・ホスピタル設立過程とコーラムの動機

3.1 18世紀初頭のイギリスの社会状況

コーラムが1704年にロンドンに戻ったころ、イギリスでは18世紀後半に始まる産業革命に向け、特に都市のロンドンでは急速な産業化が進んでいた。一方、農村では困い込み (第2次困い込み) が行われ、その結果、多数の農民が農地を失った。農地を失った農民は、ロンドンをはじめとする都市へと大量に流入し、ロンドンの人口は、18世紀の終わりには、18世紀初頭に比べ約1.5倍人口が増加した (De Vries [1984]2007:270; Howell 2014:9; 全国歴史教育研究協議会編2008:190)。Table 1は、1700~1800年のイギリス及びロンドンの人口をみたものである。比較対象として、フランス及びパリの人口もあわせて掲載した。これを見ると、実際、1700年には57万5千人であったロンドンの人口は、1800年には86万5千人にまで増加した。1700年のイギリスの総人口 (England, Wales, Scotlandの合計) は77万1千人と推定されるから、1700年時点ではイギリスの総人口の約7割がロンドンに居住していたことになる。1800年ではイギリスの総人口は214万6千人に増加し、ロンドンにはそのうち約4割が居住していたようである (この背景にはロンドン以外の地方都市の人口増加がある。例えば、イギリスでは18世紀にBristolなどの地方都市もロンドンと同様に発展していたため、地方都市の人口増加がイギリスの

Table 1. Total Population of England and France along with That of London and Paris, 1700-1800.

	1700	1750	1800
England (England, Wales, and Scotland)	771,000	1,140,000	2,146,000
London	(575,000)	(675,000)	(865,000)
France	1,747,000	1,970,000	2,382,000
Paris	(510,000)	(576,000)	(581,000)

Source: De Vries, Jan. [1984]2007. *European Urbanization 1500-1800*. New York: Routledge. p. 30, 270, 275 より抜粋、引用。

総人口の増加の背景にあると考えられる)。イギリスとフランスを比較すると、18世紀においては、総人口については常にフランスがイギリスよりも多いものの、ロンドンとパリに着目すると、ロンドンの人口はパリよりも多く、18世紀の初頭と終わりを比べると、ロンドンの人口増加率はパリのそれを上回っていることがわかる (De Vries

[1984]2007:30, 270; 中野 2012:16-20) (Table 1)。

しかし、ロンドンが大都市へと成長する陰では、農村からロンドンに移住した農民(rural migration)の窮乏化という問題が発生していた。すなわち、農村からロンドンに移住した農民の多くは生活手段を失い、窮乏化していった。貧困状態に陥ったこれら農村からの移住者は、生計を、各教区



Figure 3. William Hogarth, *Gin Lane*, 1751.

Source: The Trustees of the British Museum.

(https://www.britishmuseum.org/collectionimages/AN00012/AN00012086_001_1.jpg)

Retrieved July 25, 2019.

Note: この絵は、ロンドンの貧民層を中心にジンが大流行し、それとともに都市が荒廃する様子を描いたものである。手前の女性は子が転落死するのを構う様子もない。子どもの顔は干からび、目は落ちくぼんでいる。背後にはロンドンのBloomsburyにあるSt. George教会の三角形の塔が描かれている。このSt. George教会は現在の大英博物館(British Museum)の近くにあり(Figure2の図中、概ねC2に相当する場所)、ロンドンの中心部に位置することから、Figure 3は主にロンドン中心部の貧民層の様子を描いたものと推察される。

(parish)における、救貧法制度のもとでの救済物資に頼るか、あるいは特に1722年以降は貧民収容施設(workhouse)に入所するかしか方法がなかった。しかし、当時の救貧法制度や貧民収容施設は貧困者を、人道主義的観点から救済するものではなく、劣等処遇を原則とした、貧民者にとっては極めて過酷な救済制度であった (Howell 2014: 9)。

当時のイギリスにおける児童の状況を見ると、1700年代初頭における5歳以下の乳幼児死亡率は約75%であったが、貧民収容施設においては約90%を超えていたという。また、その頃、ロンドンでは貧民層を中心に蒸留酒であるジンが、安価かつ食欲を抑制させる、という理由で貧民層を中心に大流行(Gin Craze)していた。貧民層の中には、泣きわめく子どもをおとなしくさせるためという理由で、ジンを子どもに与える親さえもいた (Howell 2014:9)。

Figure 3は18世紀半ばのロンドンの貧民層の様子を描いた Hogarth の絵である。これを見ると、当時の貧民の生活がいかに劣悪なものであったかをうかがうことができる (Hogarth 1751)。

3.2 ファウンドリング・ホスピタルの設立

コーラムの動機を検討する前に述べておかねばならないのは、ファウンドリング・ホスピタルの設立に際して、コーラムはイギリス国王よりファウンドリング・ホスピタル設立のための勅許状を得る必要があったということである。設立勅許状を得るためにコーラムがとった方法は、ファウンドリング・ホスピタル設立に同意する貴族ら有力者から、設立同意の署名をできるだけ多く集め、それをもとに国王へ設立の勅許を求める請願書を提出する、という方法であった。しかし、貴族ら有力者から署名を集めるためのこの活動は、コーラムに実に17年間の歳月を要求することになった。この背景の一つには、コーラムが署名を得ようとした人々は、後述するように、貴族階級や、平民階級の中でも資産家や判事等、社会的地位が比較的高い人々であったため、造船工のコーラムとは、社会階級が大きく隔たっているこれらの人々から署名を集めることは、コーラムにとって

容易ではなかった、という事情がある。

こうした困難に直面しながらも、コーラムは署名を何とか集め、ある程度の署名が集まった頃の、1737年7月21日に、コーラムはイギリス国王ジョージ2世(George II, 1683-1760, 在位1727-1760)にファウンドリング・ホスピタル設立のための請願書を提出する。その後、コーラムは1739年2月13日にファウンドリング・ホスピタル設立に同意する貴族ら有力者375人分から集めた署名を国王の枢密院(Privy Council)に提出し、1739年11月20日、コーラムが70歳の時に、ついに国王ジョージ2世より、設立勅許状——正式名称は、「遺棄され捨てられた幼い児童の養育および教育のためのホスピタル設立勅許状(*The Royal Charter, Establishing an Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Young Children*)」——を正式に受け取る (Foundling Hospital 1740; McCulre 1981: 28; Howell 2014: 11; Nichols et al. 1935:19)。

コーラムがファウンドリング・ホスピタルを設立した動機は、コーラムが1737年に国王ジョージ2世にあてた以下の請願書から推察することができる。

... the frequent Murders committed on poor Miserable Infant Children at their Birth by their Cruel Parents to hide their Shame and for the Inhumane Custom of exposing New born children to Perish in the Streets or the putting out such unhappy Foundlings to wicked and barbarous Nurses who undertaking to bring them up for a Small and trifling Sum of Money do often suffer them to Starve for want of due Sustenance and Care Or if permitted to live either turn them into the Streets to begg (*sic*) or steal or Hire them out to Vicious Persons by whom they are trained up in that infamous way of living Whereby Thefts Robberys (*sic*) and Murders do grievously abound, and some of those Miserable Infants are Blinded or Maimed or Distorted in their Limbs in order to move Pity and Compassion and thereby become the fitter Instruments of gain to those Vile, Mercyless (*sic*) Wretches. (Nichols et al.

1935: 16)⁷

このように、コーラムは、冷酷な実親が自らの（非嫡出子を産む等の）恥を隠すために、新生児を殺し、また新生児を路上に遺棄して死なせ、あるいはわずかな金銭を渡して邪悪で残酷な乳母に子どもの面倒を見させ——その乳母はしばしば子どもに十分な栄養も世話も与えず飢えさせていたのであるが——、あるいは、子どもを生かしておくのであれば、物乞いや盗みのために子どもを通りに出すか、窃盗、強盗、殺人が痛ましいほど多くあるなかで、悪事を働くすべを仕込むべく、子どもを悪人に雇わせるかし、盲目ないし身体障害がある乳幼児、または人々の憐憫と同情を引くためにわざと手足を変形させられた乳幼児は、この不道徳で無慈悲な親が収入を得るためのより格好の手段になっていた、と述べ、当時の児童が置かれた惨状を訴える。そのうえで、コーラムは次のように述べ、ファウンドリング・ホスピタル設立の必要性を訴える (Nichols et al. 1935: 16; Wagner 2004: 126-7)。

'That in order to redress such deplorable Grievances and prevent as well the effusion of so much innocent blood as the fatal Consequences of that Idleness Beggary or Stealing in which such poor Foundlings are Generally bred up, and to enable them by an Early and Effectual Care of their Education to become useful Members of ye Common Wealth The said Ladys (*sic*) in their Tender Compassion. . . for the better producing good and faithful Servants from such Miserable, Cast off Children or Foundlings now a Pest to the Publik (*sic*) and a Chargeable Nuisance within the Bill of Mortality and for Settling a Yearly income for their Maintenance and proper Education until they come to fit age for Service Have in a written Instrument Declared they are desirous to encourage and Willing to Contribute towards the Erecting an Hospital. . . .

'May it therefore Please your Most Gracious

Majesty to Grant your Royal Charter...in order to be made good Servants and when Qualified to dispose of them either to the Sea or Land Service in such manner. . . (Nichols et al. 1935: 16-17)

コーラムは、この嘆かわしい惨状を是正するためには、また物乞いや窃盗の致命的結果として罪のない児童が犠牲になることを防ぐためには、これらの哀れな遺棄児童 (poor Foundlings)——今やこれらの遺棄児童 (Cast off Children) は公共の害悪 (a Pest to the Publik) になってしまっているのだが——が皆相応に養育され、国家に役立つ人材 (useful Members of ye Common Wealth) になるよう、家事使用人や、ある程度の年齢に達した時は、陸軍か海軍に従事することで身を立てることができるよう、早期の適切な教育を施す必要がある、と述べ、ファウンドリング・ホスピタル設立の許可を求める (Nichols et al. 1935: 17)。

請願書を提出後の、1739年2月13日、コーラムは375人分の署名書を枢密院に提出する。コーラムが集めた、この375人分の署名の内訳を、McClure (1981:259-260) の詳細な分析にもとづきみると、署名は89人の貴族と286人の平民から集めたものであった。375人の中には1738年時点における国会議員 (Members of Parliament) も72人含まれていた。また、286人の平民について、その具体的な職業をみると、資産家、商人、銀行家、医師等のほか、判事、弁護士等の法曹関係者や政府関係者等が含まれていた。ここからは、コーラムが経済的に裕福で、かつ社会的に影響力のある人物を注意深く選んだ上で一人一人の署名を体系的に取り付けていたことがうかがえる (Howell 2014:11; McClure 1981: 28, 259-60) (Table 2)。加えて、この署名活動が果たした社会的意義について考えると、それは貴族と平民が、社会階級の差を超えて、貧困児童の現状を問題として受け止め、それを改善するために協働した、ということにあるといえよう。

コーラムが1738年9月22日にアメリカ東部にいる友人の牧師コールマン博士 (Dr. Colman) にあてた以下の手紙からは、コーラムが署名を得た具体的な方法が記されている。これをみると、コー

Table 2. 375 Signatures Coram Collected for the Grant of the Royal Charter by Type of Social Status and Occupation

人数	
貴族(Nobility)	89
平民(Commoners)	286
内訳	平民の職業
	資産家(Country Gentleman)
	35
	商人(Merchant)
	66
	銀行家(Banker)
	7
	弁護士(Lawyer)
	18
	医師(Physician/Surgeon)
	20
	軍人(Army/Navy)
	15
	判事ないし政府関係者(Court/ Government Service)
	26
	その他(Miscellaneous Commercial/Noncommercial Occupations)
	14
	不明(Unknown)
	85
TOTAL	375

Source: McClure, Ruth K. 1981. *Coram's Children: The London Foundling Hospital in the Eighteenth Century*. New Haven: Yale University Press. p.259 (Appendix II) より抜粋、引用.

ラムは、昨年（1737年）は、長い間、病気を患っていたが、今は快復し、（署名を得るべく）日に10~12マイル（約16~20キロ）歩くことができること、残忍な実親や乳母から遺棄された、哀れな新生児や児童を救うためのホスピタル設立計画が実現するのを見届けるまでは、せめて生き長らえていたいと願っていること、署名を得る方法としては、まず、貴族の女性から署名を得、次いで貴族の男性や紳士からの、そして最終的に多くの判事からの署名を得る、という方法で、体系的に署名を取り付けていったこと等が記されている。コーラムは、この方法でなければ、いかなる大主教も、貴族も（設立同意書に）署名をするよう、説き伏せることは不可能であったであろうと述べる(Howell 2014:11; Morison 1922:43; Nichols 1935: 15)。

... I thought Long Sickness I Lay under at this time last year. ... I am now. ... in as good health as ever, I eat and Drink and Sleep Comfortably and tho heavy can Walk 10 or a dozen Miles in a day and hope to live to see the accomplishment of the Designe (*sic*) of Re[s]cuing poor Miserable Exposed Newborn Infants or Foundlings from the Cruelties of their own Parents or Barberous (*sic*) Nurses. I have a very hopefull (*sic*) prospect of the good Success of it, after many Difficulties, inexpressable (*sic*) ones, that attended my Solicitations in order to bring it before the the King in Council where it was well received. The Copys (*sic*) . . . will shew (*sic*) what round about Wayes (*sic*) I was forced to take, first to

get the first Rank of Ladys (*sic*), then the first of the Noblemen and other Gentlemen, then a Recom(m)endation Subscribed by ma(n)y Justices and others; for without that round about way I found it was Impossible to be done. . . . (Morison 1922:43)

以上から指摘できるのは、コーラムの署名活動の突破口を開いたのは、貴族の女性たちからの署名であったということである。コーラムが最初に貴族の女性たちから署名を得ることを思いついた背景には、先に触れた当時のイギリスにおけるチャリティ活動の興隆が指摘できよう。貴族階級にとって設立同意書に署名をすることはチャリティ活動の一環として捉えられていた。更に貴族階級においては、しばしばチャリティ活動を、自身の社会的地位の正当性を証明するためにも利用していた(金澤2008:194)。

すなわち、貴族の、特に女性たちが設立同意書に署名をすることで、チャリティ活動に携わろうとした背景には、少なくとも以下の2つの社会的事情が関係していた。一つは、貴族の女性たちにとって、チャリティ活動に携わることは、「社交」上必要であった、ということである。すなわち、例えば他の貴族の女性らがコーラムの提示した設立同意書に署名をしているのであれば、彼女らの手前、社交上署名をすることが、彼女の家柄も同様にまた高貴である、ということ(他の貴族の女性たちに対して)証明するために必要であった。いま一つは、貴族の女性たちにとってチャリティ活動に携わることは、社会参加の機会を得るということを意味した。すなわち、当時は男性に限られていた(法や政治等の)公的世界へと介入する機会を、署名活動は彼女らに与えるものとみなされていた(金澤2008: 209, 214; Nichols et al. 935: 15; Wagner 2004:80-83)。

コーラムが最初に貴族の女性たちから署名を得ようとした背景にはこのような事情が関係していた。それゆえ、コーラムはこれら貴族の女性たちに対しては、なぜホスピタルの設立が必要であるかを特別に説明する必要さえあまりなかったようである。

こうして署名を得る目途は何とかたったものの、勅許状を得るための次なる難題がコーラムを待ち受けていた。それはファウンドリング・ホスピタル設立のための資金調達という難題である。コーラムは、上述した友人のコールマン博士にあてた手紙(1738年9月22日付)で、続けて以下のように、署名活動後に立ちはだかる難題として、ホスピタル設立のための費用の問題について述べる。コーラムはホスピタル設立のための費用を全面的に工面する必要があること、その資金調達においても事は順調に捗っていないことを述べる。

. . . After I had the Committee of Councils order to the Attorney and Sollicitor (*sic*) General to examin(e) and Report on this affair the Next Difficulty was to get Money to pay all Fees for preparing and pas(s)ing a Charter, I was in hopes from her late Majesty's so much talked of extencive (*sic*) Goodness and Charity that the Expencc (*sic*) of passing a Royal Charter would have been defrayed, but I soon found myself Mistaken a little before this Time 12 month I was taken Sick, w'ch Sickness Confined me until the Queens Death and after that her Death Locked up all publick (*sic*) business for some time. . . . (Morison 1922:43)

コーラムは、勅許状を得るためにはホスピタル設立の費用を工面しなければならないが、それについては、当初、国王ジョージ2世の妃キャロライン(Wilhelmina Charlotte Caroline, 1683-1737, 在位1727-1737)の、(ホスピタル設立に際する)多大な善意とチャリティ(活動の一環)により、勅許状認可に要する費用は支払われるはずであったのだが、王妃が(1737年11月20日に)逝去し、コーラム自身もまた、王妃が逝去するまでの12カ月間もの間、病に伏し(それゆえ、費用を工面してもらい機会を逸することとなり)、さらに王妃の死後は(その葬儀のために)すべての公共の仕事が滞ってしまっている、と述べ、費用調達が順調に進まないことにコーラムが焦燥感を募らせている様子がうかがえる。

コールマン博士にあてた手紙からおよそ1年後の1739年9月15日に、コーラムは、イギリス・ハンティンドンのセリーナ伯爵夫人に文書を送る。その文書からは、コーラムが、ようやく国王から勅許状を得る見通しを得、国璽(Great Seal)も下賜される見込みであること、ファウンドリング・ホスピタルの設立には1739年時点ですでに17年半の歳月と労力を費やしていたということ(したがって、ファウンドリング・ホスピタル設立のための活動に、コーラムは少なくとも1722年から携わっていたこと)、しかしながら、依然として資金が不足しており、既に150ポンドもの費用がかかったにもかかわらず、それ以上の資金がさらに必要であり、これまでかかった(ホスピタル設立のための)経費にコーラム自身のために使われた金銭はただの1ペニーもないこと等が記されている⁸。

THOMAS CORAM to SELINA, COUNTESS OF HUNTINGDON.

1739, Sept.15. London.—After seventeen years and a half's contrivance, labour and fatigue I have obtained a charter for establishing an hospital for the reception, maintenance, proper instruction and employment of exposed and deserted young children. It would have passed the Great Seal last month but lies fee-bound for want of money. It has already cost 150*l.* for fees and rewards, and it requires near as much more. I do not reckon a penny for my own expence and trouble. (Harley et al. 1934: 22-23)

コーラムが勅許状を得た後の1740年9月13日にコールマン博士にあてた手紙からは、コーラムが、ホスピタル設立のための土地を獲得するために、約5500ポンドを現金で預け入れていたことが示されている。この中で、コーラムは、ホスピタルの実際の建築に手間取った結果、(ホスピタル設立に賛同する)326人からの年会費(という形での寄付)、2300ポンドの遺贈金、その他寄付金の回収が行き詰まってしまう、資金調達が困難を極めていたことを述べ、それにもかかわらず、

コーラムはホスピタル設立のために、大金を預金していたことがうかがえる(その後、1740年10月17日、ファウンドリング・ホスピタルの設立運営に関わったコーラムほか貴族らを含む、ガバナーと呼ばれる人々は、現在のロンドン市内ギルフォード通り(Guilford Street)の北側にある、56エーカー(約23万平方メートル)の広大な敷地を6500ポンドで購入し、ここにファウンドリング・ホスピタルを建設する)(Dickens 1853: 49; Howell 2014: 14; Wagner 2004: 143)⁹。

London 13th September 1740.

... I am Strong and pretty Successfull (*sic*) in accomplishing the Establishment of my Darling Project the Hospital for the Maintenance and Education of Expos'd and Deserted Young Children; after the Charter was passed in October last I got an Act of Parliament for Confirming and enlarging the Powers therein Granted. We had an Offer made to lett (*sic*) us Mountague House by Lease for an Hospital but that could not be accepted. Yet that offer Hurted (*sic*) the Charity very Much. We have between 5 and 6000 pounds in Cash paid in, 326 annual Subscriptions and 2300 *li.* Legacies not yet received. Benefactions are at a Stand because we have not began (*sic*) to Build yet which I think we should have done before now. (Morison 1922:55)

以上から、コーラムがファウンドリング・ホスピタルを設立しようとした動機は、親から遺棄された児童を救うためであり、同時にまた、今や公衆上の害悪となっている貧困児童を、養育と教育を施すことにより、国家に役立つ人材へと変えるためであったといえるだろう(Wagner 2004:127; Riding 2010:70; Sheetz-Nguyen 2012:51)。コーラムの、親から遺棄された児童を救うという動機は、愛他的な社会的良心に基づく動機といえることができる。一方、公衆の害悪となっている貧困児童を、国家に貢献する人材へと育成し直すという動機は、功利主義的関心に基づく動機といえることができる。

4. 考察

以上の分析から、コーラムがファウンドリング・ホスピタルを設立した動機は、愛他的動機と功利主義的動機であったと要約されよう (Riding 2010: 70)。愛他的動機と功利主義的動機の関係性を考えると、コーラムにおいては、これらは一致する動機であったと考えられる。愛他的動機は、ごく簡明に言えば他者の利益を追求する動機である。一方、功利主義的動機は、社会の利益 (social benefit) を追求する動機である。コーラムは、児童のための利益の追求が、ひいては社会全体の利益を導き得る、ということを見破っていたと考えられる。このことは、上述したコーラムの請願書 (1737年に国王ジョージ2世にあてたコーラムの請願書) からも明らかである。すなわち、コーラムは、この請願書で、いまや公衆の害悪でしかない貧困児童を (ファウンドリング・ホスピタルで養育し)、国家に役立つ人材へと育成し直す、という考えを示している。これは、貧困児童の利益——ファウンドリング・ホスピタルで養育されること——が、社会的な利益——国家に役立つ人材を育成すること——と一致することを指摘したものである (Riding 2010:70; Wagner 2004:127)。

一方、コーラムはこれら愛他的動機と功利主義的動機を巧妙に使い分けていた、と指摘する先行研究もある。Wagner(2004)は、コーラムは、特に署名活動の過程で、署名を得ようとする対象者に応じて設立のための理由を使い分けていた、と指摘する。すなわち、コーラムは、貴族階級の、特に女性から署名を得る際には、児童に対する愛他的観点から訴えることで署名を得、特に法曹関係者から署名を得る際には、功利主義的な観点を強調することで署名を得ていたと述べる (Wagner 2004: 80-82, 127)。

確かに、コーラムが愛他的動機と功利主義的動機とを、署名を得ようとする対象者に応じて戦略的に使い分けていたという指摘は妥当である。しかし、コーラムにおいては、この両者の動機は、別々に存在する動機ではなく、一致する動機であった。

ファウンドリング・ホスピタルが児童や社会に対して持つ機能を考えるとそれは2つある。一つは、児童の利益に貢献する機能である。これはファウンドリング・ホスピタルが持つ対個人的機能と言いうる。いま一つは、社会の利益に貢献する機能である。これはファウンドリング・ホスピタルが持つ対社会的機能と言いうる。コーラムの動機を、ファウンドリング・ホスピタルの対個人的機能と対社会的機能の側面から捉えようと、コーラムの愛他的動機——すなわち、児童の利益追求に貢献するため——は、ファウンドリング・ホスピタルが持つ対個人的機能を示すものであり、コーラムの功利主義的動機——すなわち、社会の利益追求に貢献するため——は、ファウンドリング・ホスピタルの対社会的機能を示すものであるといえる。従って、コーラムにおける愛他的動機と功利主義的動機は、コーラムにおける一致した動機を、異なる次元——個人的次元と社会的次元——から把握したものであると関係づけられるだろう。

さらに、先にみたとおり、愛他的動機と功利主義的動機の双方に共通する性質は、両者は共に道徳的行為の基盤となる性質であるということである (Comte 1844=1970: 205; Mill 1863=1967:467)。このことを鑑みると、コーラムは道徳的義務感ないし道徳的使命感をもって、ファウンドリング・ホスピタル設立に携わったということがいえるだろう。換言すれば、コーラムにおける道徳的使命感が、コーラムに17年間という歳月をかけてでもその設立達成に向けた取り組みを断念させなかった背景にある。

加えて、コーラムによる、ファウンドリング・ホスピタル設立に向けた活動が果たした社会的意義について考えると、それは署名活動を通して貧困児童の問題を社会問題化したことにあるといえる。すなわち、貧困児童の問題を、貧民層など一部の人が関与すべき個人的問題としてではなく、社会が関与すべき社会的問題として位置づけたことが、この活動が果たした、一つの社会的意義であったといえるだろう。

Notes

1. ファウンディング・ホスピタルの養護形態は、施設養護の中でも特に現代でいうところの大舎制に相当する養護形態であった。すなわち、ファウンディング・ホスピタルでは児童を男子寮と女子寮に分け、各寮内の大部屋を児童の居室とし児童を養育していた。一方、後述する石井十次により1887年に創設された岡山孤児院は小舎制に相当する養護形態をとっていた。すなわち、児童を10人程度の小集団に分け、各小集団が小寮舎で職員とともに生活を送っていた。現代における施設養護施策は、児童に対する最善の利益の保障という観点から、大舎制から小舎制へと方針を転換しており、その意味では岡山孤児院はファウンディング・ホスピタルよりも養護形態上は進んでいたといえる(柴田1964:125)。
2. *foundling*と同様に、実親と離された児童を表す関連用語として、*changeling*がある。*changeling*とは、「乳幼児期に他の児童とこっそり取り替えられた児童」を指し、1584年からこの意味で使用されていた。すなわち、*changeling*はある乳幼児をさらい、代わりに別の乳幼児を残す行為であった。*changeling*は、特に取り替えられた、すなわち、さらわれた方の児童を指す(Simpson and Weiner 1989: 18)。
3. マサチューセッツ湾会社の経営者らはイギリス東部リンカーンシャー(Lincolnshire)地方出身の「なだたるピューリタンの一群」であり、「イギリス国教会の墮落と圧政に耐えきれず」、植民地アメリカへの移住及びそこでのピューリタンの宗教理念の実現を目指した人々であったとされる(大西1997:15-16)
4. 1622年に認可されたメイン植民地(the Province of Maine)は、1658年から1820年までマサチューセッツ湾植民地(1692年からはマサチューセッツ湾自治植民地)の管轄区域に組み込まれた。
5. 功利主義と愛他主義が成立した時期は、共にファウンディング・ホスピタルが設立された時期よりも後の時代である。従って、これらの思想をコーラムの動機の分析に用いることは適切ではないかもしれないが、本稿はコーラムの動機を現代的観点から解釈するという立場にたつため、これらの

思想を援用する。

6. 金澤(2008: 188)はファウンディング・ホスピタルを「慈善信託」型として位置づけるが、コーラムは自身の遺産に基づきファウンディング・ホスピタルを設立したのではなく、貴族らからの寄付に基づき設立したのであるから、ファウンディング・ホスピタルは、「結社型」のチャリティとして位置づけられよう。
7. 原文の修正表記について。引用文中に元からあった修正表記は[]で示し、筆者による修正表記は()で示す。(sic)は原文ママを示す。
8. Burnett([1969]1993:128-129)によると、イギリスにおける国民一人あたりの平均年収は、17世紀末では8-9ポンド、1750年では12-13ポンド、1800年では22ポンドであったから、150ポンドはかなりの高収入であったことが推察される。
9. かつてファウンディング・ホスピタルがあったロンドン市内ギルフォード通りの北側の場所は、現在コーラム広場(Coram's Field)という子どものための公園となっている。

References

- 明石紀雄 1999. 「北米イギリス植民地の建設と発展」 紀平英作編『新版 世界各国史 24 アメリカ史』山川出版社. 27-63.
- Amos, Harriet, Alice Mayers, and Jig. 2006. *Thomas Coram: The Man Who Saved Children*. London: The Foundling Museum.
- Archenholz, Johann Wilhelm Von. 1791. *A Picture of England: Containing a Description of the Laws, Customs, and Manners of England. Interspersed with Curious and Interesting Anecdotes*. By M. D'Archenholz, Translated from the French. Dublin: P. Byrne.
- Bentham, Jeremy. 1789. *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*. (=1967. 山下重一訳「道徳および立法の諸原理序説」 関嘉彦責任編集『世界の名著 38 ベンサム／J.S. ミル』中央公論社.)
- Beveridge, William H. [1948] 2015. *Voluntary Action: A Report on Methods of Social Advance*. New York: Routledge.

- Buehler, Cheryl, Mary Ellen Cox, and Gary Cuddeback. 2003. "Foster Parents' Perceptions of Factors That Promote or Inhibit Successful Fostering." *Qualitative Social Work* 2(1): 61-83.
- Burnett, John. *A History of the Cost of Living*. [1969]1993. ed. Modern Revivals in Economic and Social History. Aldershot: Gregg Revivals.
- Comte, Auguste. 1844. *Discours Sur L'esprit Positif*. (=1970. 霧生和夫訳「実証精神論」清水幾太郎責任編集『世界の名著 36 コント／スペンサー』中央公論社.)
- De Vries, Jan. [1984]2007. *European Urbanization 1500-1800*. New York: Routledge.
- Dickens, Charles. 1853. 'Received, a Blank Child.' *Household Words* 7(156): 49-53.
- Foundling Hospital. 1740. *The Royal Charter, Establishing an Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Young Children*. London.
- 長谷川貴彦2014. 『イギリス福祉国家の歴史的源流——近世・近代転換期の中間団体』東京大学出版会.
- Harley, John, Bickley, Francis, Hastings, Reginald Rawdon, Hastings, Warren, Conway of Conway Castle, Edward Conway, Davies, John, and Bramhall, John. 1934. *Report on the Manuscripts of the Late Reginald Rawdon Hastings, Esq., of the Manor House, Ashby De La Zouch*. Historical Manuscripts Commission (Series); Volume III. London: H.M.S.O.
- Hogarth, William. 1740. *Captain Thomas Coram*. Coram in the Care of the Foundling Museum (Art UK). Retrieved July 25, 2019. (https://artuk.org/discover/artworks/captain-thomas-coram-16681751-191925/search/venue:the-foundling-museum-706955167/page/3/view_as/grid).
- Hogarth, William. 1751. *Gin Lane*. The Trustees of the British Museum. Retrieved July 25, 2019. (https://www.britishmuseum.org/collectio nimages/AN00012/AN00012086_001_1.jpg).
- Howell, Caro. 2014. *The Foundling Museum: An Introduction*. London: The Foundling Museum.
- Howell, Caro. 2018. *William Hogarth and the Foundling Hospital*. HENI Talks on Vimeo.
- Innes, Joanna. [1996]2016. "The 'Mixed Economy of Welfare' in Early Modern England: Assessments of the Options from Hale to Malthus(c.1683-1803)." Pp.139-180 in *Charity, Self-Interest and Welfare in the English Past*, edited by M. J. Daunton. New York: Routledge.
- Isomäki, Veli-Pekka. 2002. "The Fuzzy Foster Parenting—a Theoretical Approach." *The Social Science Journal* 39(4): 625-38.
- 金澤周作 2008. 『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会.
- 金子光一 2009. 「イギリスの児童福祉領域における国家責任主義への移行過程」『東洋大学社会福祉研究』2:42-53.
- 川北稔 1990. 『民衆の大英帝国——近世イギリス社会とアメリカ移民』岩波書店.
- 小林章夫 1986. 『ロンドン・フェア——18世紀英国風俗事情』駸々堂出版.
- 小林章夫・齊藤貴子 2011. 『諷刺画で読む18世紀イギリス——ホガスとその時代』朝日新聞出版.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 2015. 「平成24年度児童養護施設入所児童等調査結果」.
- MacGregor, Tracy E, Susan Rodger, Anne L Cummings, and Alan W Leschied. 2006. "The Needs of Foster Parents: A Qualitative Study of Motivation, Support, and Retention." *Qualitative Social Work* 5(3): 351-68.
- McClure, Ruth K. 1981. *Coram's Children: The London Foundling Hospital in the Eighteenth Century*. New Haven: Yale University Press.
- Mill, John Stuart. 1863. *Utilitarianism*. (=1967. 伊原吉之助訳「功利主義論」関嘉彦責任編集『世界の名著 38 ベンサム／J.S. ミル』中央公論社.)
- 森重雄. 2000. 「資料から推理する」今田高俊編『社会学研究法・リアリティの捉え方』有斐閣. 83-110.
- Morison, Samuel Eliot. 1922. "October Meeting, 1922. Gifts to the Society; Miss Quincy's Bequest; Henry Herbert Edes; Lavisse, Prothero and Dunning; Key of Port Royal; Letters of Thomas Coram; Edward Henry Clement." *Proceedings of the Massachusetts Historical Society* 56 : 1-68.
- 中野いく子 1979. 「イギリスにおける戦後のボランティア・アクションの展開」『季刊社会保障研究』14(4): 67-79.
- 中野忠 2012. 「18世紀イギリス都市論の射程——「都

- 市ルネサンス」論再考」中野忠・道重一郎・唐澤達之編『18世紀イギリスの都市を探る——「都市ルネサンス」論再考』刀水書房, 13-41.
- 徳仁親王 1991. 「18世紀テムズ川における輸送船舶及び輸送業者について」『地学雑誌』100(1): 3-18.
- Nichols, Reginald Hugh, F. A. Wray, and John De Monins Johnson. 1935. *The History of the Foundling Hospital*. London: Oxford University Press, H. Milford.
- 大西直樹 1997. 『ニューイングランドの宗教と社会』彩流社.
- Ollington, Robin and Albany Wiseman. 2018. *Captain Coram: Champion for Children. My Story*. London: Coram.
- 岡村東洋光・高田実・金澤周作 2012. 「近現代イギリスにおける福祉ボランティア——重畳するフィランソロピーの歴史」岡村東洋光・高田実・金澤周作編『英国福祉ボランティアの起源——資本・コミュニティ・国家』ミネルヴァ書房, 1-20.
- 大野道邦 1993. 「愛他主義」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣, 2-3.
- Pennington, Edgar Legare. "Anglican Beginnings in Massachusetts." *Historical Magazine of the Protestant Episcopal Church* 10, no. 3 (1941): 242-89.
- Porter, Roy. 1995. *London: A Social History*. Cambridge: Harvard University Press.
- Pugh, Gillian. 2007. *London's Forgotten Children: Thomas Coram and the Foundling Hospital*. Stroud, Gloucestershire: Tempus Publishing Limited.
- Riding, Jacqueline. 2010. *Mid-Georgian Britain: 1740-69*. Shire Living Histories no.7. Oxford: Shire.
- Rocque, John, John Pine, and John Tinney. 1746. *A plan of the cities of London and Westminster, and borough of Southwark, with the contiguous buildings*. London: John Pine & John Tinney. [Map] Retrieved from the Library of Congress, January 22, 2020 (<https://www.loc.gov/item/76696823/>).
- Sedgwick, Romney. 1970. *The House of Commons, 1715-1754*. London: Published for the History of Parliament Trust by H.M.S.O.
- 柴田善守 1964. 『石井十次の生涯と思想』春秋社.
- Sheetz-Nguyen, Jessica A. 2012. *Victorian Women, Unwed Mothers and the London Foundling Hospital*. London: Continuum.
- Simpson, J. A., and E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary Second Edition*. Oxford: Clarendon Press.
- 上村能弘 2013. 「ファクター制度の起源」『経済集志』83(1):27-48.
- Wagner, Gillian. 2004. *Thomas Coram, Gent. 1668-1751*. Woodbridge: Boydell.
- 山口真理 2000. 「18世紀イングランドの捨て子処遇における「家族」と「教育」——ファウンドリング・ホスピタルからハンウェイ法へ」『日本の教育史学』43: 195-214.
- 吉村(森本)真美 2015. 「捨て子と帝国：ロンドン・ファウンドリング・ホスピタル(1741-1954)」『神戸女子大学文学部紀要』48:43-57.
- 全国歴史教育研究協議会編. 2008. 『世界史B用語集改訂版』山川出版社.